

醗界春秋

昭和26年3月31日第三種郵便物認可 第97巻第190号通巻1828号 2005年4月15日

No. 97

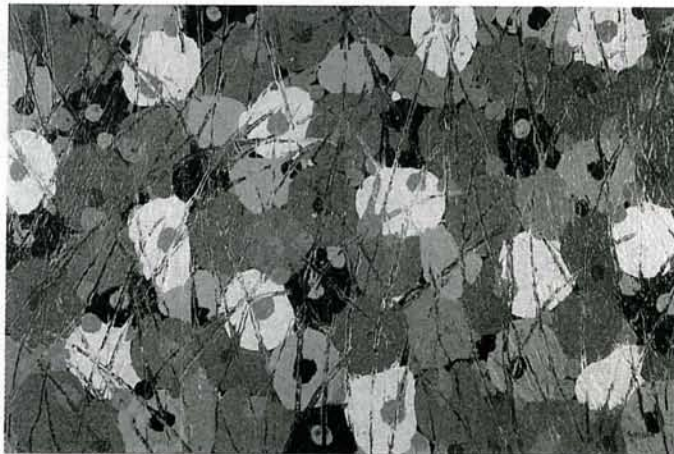
東洋と西洋を共有するベルギーの 前衛作家「パトリック・ジェロラ」展

今月23日からメルシャン軽井沢美術館で

メルシャン軽井沢美術館(長野県北佐久郡御代田町 館長・鈴木忠雄メルシャン(株)代表取締役会長)では、今月23日から7月3日まで「パトリック・ジェロラ」展を開催する。

パトリック・ジェロラは1959年、ベルギーの首都ブリュッセルに生まれ、現在、日本を拠点に創作活動を行なっている。今回の展覧会では、ジェロラが1997年から2005年に制作したフレスコ画60点、ブリュッセル名物の小便小僧に彩色を施したオブジェ42点など106点が展示されるが、中でも今回のために制作された世界四大宝石100個(ダイヤモンド、サファイヤ、ルビー、エメラルド各25個、合計27.98カラット)を用いた新作「祭り」は必見。ジェロラ本人が展示空間の演出も行っている。

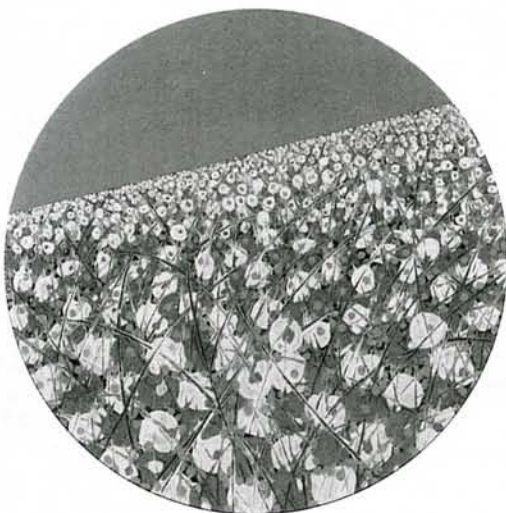
ジェロラは“東洋と西洋を共有するベルギー前衛作家”と呼ばれ、画家である母親の影響を受けて育った。ブリュッセル王立美術アカデミー卒業後、1981年から“モダンバレエの魔術師”モーリス・ベジャールが主宰する舞踊学校「20世紀バレエ団」や、同バレエ団で



《巨大な》 Monumental
2000年フレスコ/カンヴァス97×146cm



《鎌倉》 Kamakura
2000年フレスコ/カンヴァス
97×146cm



《ジャポニダ》 Japonida
2001年 フレスコ/カンヴァス 直径120cm

会に約20点を出品、ファンを広げた。先月開幕した愛知万博ベルギー館にも出品している。

今回の展覧会では、ジェロラの近年の風景画が中心に紹介される。“自然界に存在する自然固有の色は、人間を活気付ける葉の役割りを果たす”とする彼は、土、石など自然由来の素材を利用して自らの色を創りだし、作品に用いる。特に今回は、主に展示される近年のフレスコ画法による風景画は、その独特な色彩とリズム感のある線やフォルムによって、自然の息吹、そして光と音が溢れ出す様な官能的な世界を創り出している。鎌倉にアトリエを設けた1989年以降、彼の作品には、自然と共存し、巧妙に光を取り入れる日本文化の影響が顕著になっており、“感じたことを描く”というその作品は、東洋人に西洋を、西洋人に東洋を彷彿とさせる。

振付け・舞台監督を務めるミシャ・ヴァン・ウック率いる劇団「ムードラ」で舞台美術を手がけ、ミラノ、パリ、アムステルダム、フィレンツェ公演に参加。その後、1983年に生活と創作活動の拠点を日本に移し、つくば科学万博フランス館の装飾(1985年)や壁画制作に携わった。1988年には画家、音楽家、ダンサーなど新進気鋭のアーティストとともに「PAXO studio」を設立、翌年、鎌倉市仁見つけた純日本家屋をアトリエとして意欲的な活動を行っている。1998年には駐日ベルギー王国大使館公邸に「Kamakura in Full Bloom (満開の鎌倉)」が常設展示されている。

“ベルギーの民間大使”と言われるほどベルギーと日本の文化交流にも積極的に参加、1999年には静岡県沼津市の「ベルギーフェスティバルin沼津」の総合プロデュースを手がけ、2000年には伊勢丹美術館(東京)で開かれた展覧



《赤色の背景の花束》 Bouquet of flowers
1999年 フレスコ/カンヴァス 100X80cm



《おもちゃ》 Jouets
2005年 フレスコ/ポリエステル製の彫形 高さ60cm